

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 22 日現在

機関番号：32644
 研究種目：挑戦的萌芽研究
 研究期間：2014～2016
 課題番号：26570009
 研究課題名(和文) 東南アジア・ネットワーク型海民社会の形成過程：民族考古学を軸とする複合的研究

 研究課題名(英文) Areal Study of Maritime Network Societies and People in Island Southeast Asia: Ethno-Archaeological Approach

 研究代表者
 小野 林太郎(Ono, Rintaro)

 東海大学・海洋学部・准教授

 研究者番号：40462204

 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究ではインドネシアを軸とした海民の民族考古学的フィールド調査と現地での資料収集、またこれらをベースに、海民やネットワーク型社会の成立過程に関する歴史・考古学的な分析を行えたことがまず挙げられる。その成果として、本研究では東南アジアにおける海民やその社会の原型(プロトタイプ)が新石器時代期まで遡れる可能性を指摘しえた。いっぽう、現代における海民を対象とした空間・地政学的な分析では、現代の国境線やインドネシアにおける州・県といった境界線を意識的、戦略的に超えながらネットワークを拡大する海民の動態の把握・理解を進めることができた

研究成果の概要(英文)：Our project conducted the fieldwork studies on maritime people in Island Southeast Asia, mainly in Indonesia (Sulawesi and Northern Maluku Islands) to analyze the historical process of appearance and development of maritime people and their society/culture in Island Southeast Asia. In our temporal result, we provide our hypothesis that such people and societies might appeared as proto-type in Neolithic times in Southeast Asia based on our ethno-archaeological data. On the other hand, our anthropological and geographical study on the contemporary maritime people and their networking in Indonesia collect active and detail data of their networking process and system including migrations and tradings in maritime world. Based on these discussion and data, we are planing to publish a book about maritime people and their maritime network societies in Southeast Asia and Pacific in this year.

研究分野：地域研究

キーワード：海域研究 海域東南アジア 海民 ネットワーク型社会 民族考古学 インドネシア

1. 研究開始当初の背景

海民研究は、日本やアジアの海域世界を対象とした人文系学問の重要な研究領域として、国内外において一定の蓄積がある (e.g. 網野 1998; 秋道 2013; 大林 1987; 後藤 2010; Sather 1997; Spohrer 1977)。しかし先行研究の多くは、歴史学や民族学といった閉じられた専門領域において行われてきた。そのため、海民社会の生成から発展、現在までの長期的な時間軸を視野に入れ、同時に各海域の生態環境や地形・気候といった空間面の特徴をも考察対象に含めるような総合的な海民研究は限定的であった。

これに対し、報告者 (小野林太郎) は東南アジアとオセアニアの海民を対象に、民族考古学や生態人類学の方法論を援用し、その資源利用や移住の戦略を先史時代から現代までの時間軸で検討してきた (e.g. 小野 2007, 2011)。また本研究プロジェクトの分担研究者を務めた長津一史は、海域東南アジアの海民を対象に、フィールドワークに基づく文化人類学的手法や地域情報学的手法を用いて、近現代以降の海民社会の変容を明らかにしてきた (長津 2012, 2016)。

こうした研究背景をふまえ私たちは、2012 年度に採択された国立民族学博物館の共同研究「アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類学的研究 (代表: 小野) で、他の海民研究者とともに海民研究の方法論について議論を重ねてきた。その過程において、民族考古学・生態人類学・地域情報学を組み合わせた複合的なアプローチの海民研究における必要性和有効性を強く認識するに至ったのが、本研究開始の背景である。

2. 研究の目的

本研究は、海域東南アジアにおける海民を主体としたネットワーク型社会の形成過程の動態を、民族考古学、生態人類学、および地域情報学の方法論を複合的に用いて

明らかにすることを目的とする。民族考古学・生態人類学は、先史時代から現在までの資源利用や物質文化を検討することができる。地域情報学は、人口センサスや GIS 等のマクロな時空間情報データを扱うことができる。

フィールド調査を軸に両者を組み合わせる本研究のアプローチは、文字史料が極めて少なく、かつ複数の国家領域に跨って広範囲に分布する海民社会の形成過程を解明する上で高い有効性を持つ。本研究は、こうした複合的なアプローチに基づいて、海域東南アジアの海民社会の歴史・生態・文化的基盤を包括的に捉えようとする、新たな地域研究の試みでもあった。

またその具体的な研究対象としたのが、海域東南アジアにおいても最も広範囲に拡散居住するサマ (バジャウ) を代表とする海民の人びとである。サマ・バジャウ集団はとくに東インドネシアを中心に広範囲に分布しているが、本研究では彼らの人口が最も多いとされるスラウェシ・マルク海域に絞り、民族考古学調査と時空間情報データの収集分析に基づいて、以下の3点を分析する上で必要となるデータの収集に努めた。すなわち、(1) 先史時代 (新石器時代期) までを対象とした海民に共通するネットワーク型社会の生成過程と地域的特徴、(2) 植民地時代以降におけるサマの移動、海産物利用、物質文化、民族形成の変遷、(3) 現在進行形の開発・グローバル化時代における海民社会の動態的变化、の3点である。

3. 研究の方法

本研究で試みた方法として特筆できるのは、民族考古学・生態人類学・地域情報学的手法の援用である。こうした手法を複合的に用いることで、東南アジアの海民社会の形成過程を、先史時代から現代までの長期的時間軸の中で総合的に理解することを

目指した。本研究で試みる方法論における第二の斬新性は、人口センサスやGISといったマクロな時空間情報データをも検討対象とすることで、とくにグローバル化を始めとする同時代的な歴史過程を射程におき、海民社会において現在進行で起こっている動態にもアプローチする点にある。これらの手法を同時に援用することで、本研究では長期的でマクロな視点と短期的でミクロな視点の両面からの地域研究を実践し、海民の「ネットワーク型社会」を、時間と空間双方の軸から俯瞰的に再検討する。

フィールド調査国はいずれもインドネシアで、スラウェシ・北マルク諸島に点在するサマを中心とする海民集落とその周辺域を対象とした。調査対象としている集落のうち、共通する集落については可能な限り共同調査として実施し、それ以外の集落においては各自で調査を遂行する。一方、ジャカルタや各州都での電子版センサス、人口移動、資源利用、民族間関係に関わる統計データについては全員で収集を進め、密に情報交換をとりつつデータベース化と分析を進めた。これらの成果は、まず各自の研究成果としてまとめ、個別の発表を行いつつ、共同研究や研究打ち合わせの機会に議論による統合化を試みた。

4. 研究成果

本研究ではインドネシアを軸とした海民の民族考古学的フィールド調査、人口センサスやGISといったマクロな時空間情報データの整理、そして現地での資料収集と分析によって得られたデータをベースに、海民やネットワーク型社会の成立過程に関する歴史・考古学的な分析を行えた。

まず民族考古学的フィールドワークの成果においては、北マルク諸島のカヨア島に暮らすサマ・バジャウ集団の出自に関する聞き取り調査、現在の漁撈活動や資源利用に関わる聞き取りと観察調査によるデータ

の収集を行った。またカヨア島の西岸に位置する新石器時代遺跡（ウアッタムディ遺跡）の発掘調査でこれまでに得られた考古学データや、出土遺物が保管されている北スラウェシ州マナド市にある考古局を訪問し、新石器時代期における海産・陸産資源の利用状況についての把握も務めた [論文 1; 図書 1,2,3,4]。こうした一次的資料に加え、先行研究で得られてきた考古学データ、サマ・バジャウを中心とする海民研究に関する先行研究の成果を総合的に検討し、東南アジアにおける海民やその社会の原型（プロトタイプ）が新石器時代期まで遡れる可能性を指摘した [図書 8]。

こうした仮説構築が可能となった鍵概念として、以下にあげる現代、あるいは民族誌時代の海民がもつ「ネットワーク性」のあり方や移住・移動のパターンが、民族考古学的なアプローチより描き出された新石器時代期におけるパターンとも共通性がみられる点が挙げられる。

こうした総合的検討を可能にしたデータとして、現代における海民を対象とした空間・地政学的な分析では、インドネシアを中心に海域東南アジアにおけるサマ・バジャウ集団の分布域と人口動態を明らかにした。さらにスラウェシ、ボルネオ島、カンゲアン諸島でのサマ・バジャウ集団を対象とした聞き取り調査に基づき、現代の国境線やインドネシアにおける州・県といった境界線を意識的、戦略的に超えながらネットワークを拡大する海民の動態を把握することができた [論文 2,3,4; 図書 5,6,7]。

これらの成果に加え、本科研プロジェクトとほぼ並行して代表者と分担者らが開催してきた国立民族学博物館での共同研究では、さらに東アジアやオセアニア海域における海民や海域ネットワーク性を対象とした研究事例についても検討することができ、研究分野や専門地域を超えた様々な研究者

との活発な議論を行う機会があった。これらの成果を総合した編著書[図書 8]を 2017 年度内に昭和堂より刊行予定である。

引用文献

網野善彦 1998『海民と日本社会』新人物往来社

秋道智彌 2013『海に生きる—海人の民族学』東京：東京大学出版会

大林太良 1987『海人の伝統』東京：中央公論社

小野林太郎 2007「ボルネオ島サマ人による漁撈の「近代化」と「伝統」：陸サマと海サマによる漁撈の比較をとおして」『国立民族学博物館研究報告』31(4): 497-579.

小野林太郎 2011『海域世界の地域研究：海民と漁撈の民族考古学』「地域研究叢書 22」京都：京都大学学術出版会

後藤明 2010『海から見た日本人：海人で読む日本の歴史』東京：講談社

長津一史 2012「異種混濁性のジェネオロジー：スラウェシ周辺海域におけるバジョ人の生成過程とその文脈」『民族大国インドネシア：文化継承とアイデンティティ』、鏡味治也（編）249-284 頁．東京：木犀社。

長津一史 2016「海民の社会空間：東南アジアにみる混濁と共生のかたち」『小さな民のグローバル学—共生の思想と実践をもとめて』甲斐田万智・佐竹眞明・長津一史・幡谷則子（編）111-14 頁．東京：上智大学出版。

Sather, C. 1997. *The Bajau Laut: Adaptation, History and Fate in a Maritime Fishing Society of Southeast Sabah*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.

Spoher, David E. 1977 <1965>. *The Sea Nomads: A Study of the Maritime Boat People of Southeast Asia*. Singapore: National Museum of Singapore (reprinted in 1977 with postscript).

5 . 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 5 件)

- 1 Ono, Rintaro, A. Octaviana, F. Aziz D. Prastiningtyas, N. Iriyanto M. Ririmasei, I. B. Zesse, Y. Hisa. (in press.) Development of Regional Maritime Networks during the Early Metal Ages in Northern Maluku Islands: A view from excavated pottery and glass ornaments. *Journal of Island and Coastal Archaeology*. (査読付き)
- 2 Nagatsu, Kazufumi 2016. “Social Space of the Sea Peoples: A Study on the Arts of Syncretism and Symbiosis in the Southeast Asian Maritime World.” *The Journal of Sophia Asian Studies* 33: 111-140. (査読付)
- 3 Nagatsu, Kazufumi. 2016. “Maritime Diaspora and Creolization: A Genealogy of the Sama-Bajau in Insular Southeast Asia.” *Senri Ethnological Studies* (in press). (査読付)
- 4 長津一史. 2014. 「マレーシア・サバ州におけるイスラームの制度化——歴史過程とその特徴」『東洋大学アジア文化研究所研究年報』48: 279-296.
- 5 後藤 明 2014「ポリネシアにおける考古天文学の動向」、『東南アジア考古学』34: 75-81 (査読付).

〔学会発表〕(計 15 件)

1. Ono Rintaro et al. 2016.9. “Development of Regional Maritime Networks during the Early Metal Ages in Northern Wallacea” *The 8th World Archaeology Congress*, Kyoto: Doshisha University. (査読付・国際学会)
2. Ono Rintaro et al. 2016.7. “Development of Maritime Networks during Neolithic to Early Metal Ages in Northern Maluku”, *The International Austronesian Symposium*, Indonesia: Bali (Poster Presentation) (査読付・国際学会)

3. Nagatsu, Kazufumi 2016.7. “Bajau as Maritime Creoles: Dynamic of the Ethnogenesis in Southeast Asian Maritime World,” in Panel “Problematizing Inequality and Inclusiveness of the “Masyarakat Adat”: The Power-knowledge Nexus. (Panel Organizer: Herry Yogaswara, Riwanto Tirtosudarmo & Fadjar I. Thufail). *The 6th International Symposium of Jurnal Antropologi Indonesia*. Depok: University of Indonesia (査読付・国際シンポジウム)
4. 長津一史 2016.5. 「東南アジア海民論と二つの比較 地域研究的越境の試みとして」, 第 95 回東南アジア学会研究大会 (大阪大学) パネル「東南アジア海民論と二つの比較 地域研究的越境の試みとして」(査読付き)
5. Ono Rintaro et al. 2015.12 “The First Colonizations and Maritime Adaptation in Northern Maluku Islands during the late Pleistocene and Holocene”, *Consortium for Southeast Asian Studies in Asia conference (SEASIA)*, Kyoto: Kyoto International Conference Center. (査読付・国際シンポジウム)
6. Nagatsu, Kazufumi 2015.12. “The Making of ‘Pious Bajau’: Two Cases of Islamization at Margin in Malaysia and Indonesia.” in Panel “Ethnic Re/formation at Margins: Negotiations with Global Institutions, NGOs and Missionaries in Insular Southeast Asia.” (Panel Organizer: Kazufumi, Nagatsu). *Consortium for Southeast Asian Studies in Asia (SEASIA)* Kyoto: Kyoto International Conference Center. (査読付・国際シンポジウム)
7. 長津一史 2015.12. 「いかに『ふつう』の大学生を東南アジアに向かわせるか 古紙・古着・コーヒーの臨地教育とその道のり」, 第 94 回東南アジア学会研究大会 (早稲田大学) 統一シンポジウム「フィールドに学ぶ東南アジア - 体験学習から研究者・実務家養成まで」(組織者: 島上宗子・長津一史) (査読付)
8. 長津一史 2015.11. 「海民の生成と社会空間 東南アジアにみる混淆と共生のかたち」北九州市立大学アジア文化社会研究センター・シンポジウム「国を越える人々 越境の文化論」, 北九州: 北九州市立大学北方キャンパス. (招待講演)
9. Nagatsu, Kazufumi 2015.4. “Orang Bajau sebagai Kreol Maritim: Ethnogenesis dan Kontek Sosio-ekologinya di Laut Wallacea,” *Seminar Nasional: Peranan Geografi dalam Mendukung Kedaulatan Pangan*, Cibinon: Badan Informasi Geospasial (インドネシア語「海のクレオール集団としてのバジャウ ウォーレシア海域における民族生成とその社会生態的文脈」国家セミナー「フードセキュリティを支えるための地理学の役割」チビノン: 地理空間情報局) 招待講演)
10. 小野林太郎 2015.1 「東南アジアにおける海人・海民とその系譜: ヌサントオからサマ・バジャウまで」中部人類学談話会・東南アジア考古学会共催公開研究会、名古屋: 南山大学
11. 小野林太郎 2014.11 「新石器～金属器時代におけるウォーラシア海域の人類移住と海域ネットワーク」、東南アジア考古学会大会『東南アジア・オセアニア・琉球における人類の移住と海域ネットワーク社会』、東京: 上智大学 (査読付)
12. Nagatsu, Kazufumi 2014.8. “The Bajau as a Maritime Creole: Periphery, Mobility

- and Ethnic Process in Wallacean Sea, Southeast Asia,” *12th International Borneo Research Council Conference*, Kota Kinabalu: Universiti Malaysia Sabah. (査読付・国際学会)
13. Nagatsu, Kazufumi 2014.5. “Ethnogenesis of the Bajau as a Maritime Creole and its Socio-ecological Contexts in the Wallacean Sea, Southeast Asia,” *International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES)*, Chiba: Makuhari Messe. (査読付・国際学会)
14. Nagatsu, Kazufumi 2014.2. “New Maneuver through Old Network: Maritime Peoples’ Trading of Sea Turtle and Used Clothes in Wallacea,” *Asian CORE Program Seminar: Interface, Negotiation, and Interaction in Southeast Asia*, Kyoto: CSEAS, Kyoto University. (国際セミナー)
15. Ono Rintaro et al, 2014.1. “Development of Regional Maritime Networks during the past 3000 years in Northern Maluku Islands”, *The 30th IPPA Conference*, Cambodia: Siem Reap. (査読付・国際学会)
16. [図書](計 8件)
1. 小野林太郎・長津一史・印東道子 (編) 印刷中 『海民の移動誌』 京都：昭和堂
 2. 小野林太郎 2017 『海の人類史：東南アジア・オセアニア海域の考古学』 『環太平洋文明叢書 5』 東京：雄山閣
 3. 小野林太郎 2017 『東南アジア・オセアニア海域に進出した漁撈採集民と海洋適応』 『狩猟採集民からみた地球環境史—自然・隣人・文明との共生』、池谷和信 (編) 23-41 頁、東京：東京大学出版会
 4. 長津一史 2017 『境域』 『<シリーズ 東南アジア地域研究> 政治』 山本信人 (編). 71-91 ページ. 東京：慶應義塾大学出版会 .
 5. Ono, Rintaro 2016. Human History of Maritime Exploitation and Adaptation Process to Coastal and Marine Environments – A View from the Case of Wallacea and the Pacific. In Maged Marghany ed. *Applied Studies of Coastal and Marine Environments*, pp. 389-426. InTech Publisher. DOI: 10.5772/60743
 6. 小野林太郎 2016 『海道の起源を求め、海域世界を歩く』 『小さな民のグローバル学：共生の思想と実践をもとめて』 甲斐田万智子・佐竹眞明・長津一史・幡谷則子 (編) 370-372 頁. 東京：上智大学出版
 7. 甲斐田万智子・佐竹眞明・長津一史・幡谷則子 (編) 2016. 『小さな民のグローバル学—共生の思想と実践をもとめて』 東京：上智大学出版会 .
 8. 長津一史 2016. 「海民の社会空間——東南アジアにみる混淆と共生のかたち」 『小さな民のグローバル学——共生の思想と実践をもとめて』 甲斐田万智子・佐竹眞明・長津一史・幡谷則子 (編) 280-305 頁 . 東京：上智大学出版会 .
6. 研究組織
- (1) 研究代表者
小野林太郎 (ONO, Rintaro)
東海大学・海洋学部・准教授
研究者番号：40462204
 - (2) 研究分担者
長津一史 (NAGATSU, Kazuhumi)
東洋大学・社会学部・准教授
研究者番号：20324676
 - (3) 連携研究者
後藤明 (GOTO Akira)
南山大学・人文学部・教授
研究者番号：40205589